北部企業紹介 取材

株式会社ワタマサ

http://www.watamasa.jp/

北部地域において、自社の強みを生かし、
積極的に将来の産業構造や顧客ニーズに備えて努力を続けている
中小企業を紹介します。

代表取締役社長
渡邉 正輝 氏

丹後ちりめんの織元として100余年の歴史を有し、様々な品種の紋織物を展開

当社は1918(大正7)年に与謝野町にて、曽祖父が丹後ちりめんの織元として創業しました。1991(平成3)年の会社設立時に現在の本社・製織工場を新設。創業時からある工場は現在、撚糸・整経・第二製織工場として稼働しています。

本社に隣接する製織工場。
見学(要予約)にも対応している

製織工場は天井が高く、ジャカード装置の調整を行う織機上部のスペースも広く開放的

1300年続く絹織物産地である丹後地方において、シボと呼ぶ凹凸のある白生地の絹織物、いわゆる丹後ちりめんの生産が始まったのは、江戸時代中期のことです。丹後ちりめんにはいろいろな種類がありますが、当社の主力は、ジャカード装置を使い経(たて)糸を上下に動かすことによって地模様を織り出す紋織生地。丹後の機(はた)屋で一般的に使われている、経糸を動かすための針が900本のジャガード織機に加えて、倍の細かさで柄を表現できる1800本の針のジャガード織機も導入し、バリエーション豊富な紋織生地を生み出してきました。3代目である父がいち早く紋紙(織柄を製織するためジャカード装置を動かす型紙)をデータ化したため祖父の代の柄まで残っており、従来から提案型のものづくりを実践してきたこともあって、今では4000以上の柄を有しています。また、糸の仕入れから織り上げるまでのほとんどの工程を自社で行う一貫生産体制を整えていること、着物・襦袢・帯揚・半衿など多彩な品種を手掛けていることも当社の強みです。

多彩な柄の紋織物を多品種で展開

2007年、大学卒業後、呉服問屋での4年間の修行を経て私が入社してからは、販路拡大に積極的に取り組んできました。受注生産をメインとしながらも、先染めの着物や帯といった自社製品を開発し、小口販売ができるよう在庫を持ち、丹後の機屋では初と思われる京都市内での自社単独の展示商談会を開催。通常、卸業が中心である織元の取引先は多くて10社程度ですが、当社は小売店や呉服店との直接取引も行っており、現在、取引先は約300社にのぼります。

丹後ちりめんの市場拡大を目指しあらゆることに挑戦していきたい

2020(令和2)年、丹後ちりめんは創業300年を迎えました。日本の和装文化を支える日本一の絹織物産地として存続し続け、さらなる発展を遂げるためには、市場の拡大に努めなければなりません。

そのために当社が取り組んできたことの一つが、絹100%なのに自宅で水洗いできる生地の開発です。洗濯や着付けが大変といった着物の課題を一つひとつクリアしていくことで、より多くの人に、気軽に着物を楽しんでもらえるようにしたいとの思いからスタートしました。2019(令和元)年には小売店・メーカーとのタイアップで「洗える着物」を発売し、好評をいただいています。

並行して、着物という形にこだわらず、丹後ちりめんの用途を広げていくことの必要性も感じています。当社が着目したのは、丹後ちりめんへの印刷技術の活用。現在、丹後ちりめんを使ったラベルの供給について、酒造メーカーと商談を進めているところです。

ほかにも、丹後ちりめんに対するフォーマルなイメージを払拭し、身近に感じてもらうことを目的とした部屋着の開発など、アイデアは尽きません。そうした一つひとつの取り組みが着物文化を広げることにつながると信じ、丹後ちりめんのクオリティや機能性を追求しながら、様々なことに挑戦していきたい。丹後ちりめんという地域産業の発展や社会に貢献できる魅力ある機屋であり続けることで、当社の次の100年を紡いでいきたいと考えています。

販路拡大を目的に開発した先染めの自社製品

Company Data

- 代表取締役社長／渡邉 正輝
- 所　在　地／京都府与謝郡与謝野町字岩屋961-3
- 電　　話／0772-43-0032　●創　　業／1918(大正7)年
- 事 業 内 容／丹後ちりめん製造販売

●お問い合わせ先／ (公財)京都産業21 北部支援センター　TEL：0772-69-3675　E-mail：hokubu@ki21.jp